石碑のある風景

―近世の旅行者と松島―

高橋　陽一*

The landscape of stone monuments : Travelers and Matsushima in early modern Japan

TAKAHASHI Yoichi

要旨

本稿は、従来旅行史研究でなされてこなかった旅の「負の効果」を分析することにより、肯定的な意味のみでは把握しきれない旅の新たな性格を浮き彫りにし、近世の旅の内実をより豊かに描き出すことを目的とした。具体的には、旅先に対して旅行者が抱く過去のイメージと実際の光景との懸隔を、近世の人々が抱く「風景観」の問題として取り上げ、当時の人々の名所に対する風景観と現実の光景に対する感懐の間に溝が生じる理由を解明し、当時の旅の性格について展望することを課題とした。使用した主な史料は知識人が記した紀行文であり、対象は日本三景の 1 つ松島の名所雄島である。

雄島では、18 世紀半ば以降に芭蕉およびその門人を顕彰した句碑が建立され、石碑が乱立する光景が現出したが、旅行者の中にはこれに嫌悪感や忌避感を抱く者がいた。雄島には、歌枕の地・霊場・芭蕉来訪の地（句碑建立の地）という中世から近世にかけての風景の変遷があった。過去の歌枕を彷彿とさせる風景、あるいは霊場的風景との邂逅を期待して雄島を訪れた人々は、石碑の林立する現実の光景を目の当たりにし、失望感や憤りを露呈したのである。

留意すべきは、雄島を訪れた旅行者があらゆる過去に思いを馳せているのではないということである。特に学者層は、自らの文化的価値観に基づき、近世に建立された石碑に対して強い批判的まなざしを向け、古代中世の歌枕・霊場的風景に対する憧憬を露わにした。旅行者は、旅先で回帰する過去を取捨選択しているのである。

近世の旅は、自らが思い描く名所が消滅しつつあることを旅行者が認識させられる行程であったと性格付けられるのではあるまいか。近世後期にかけて旅が隆盛することは、皮肉にも名所の現実の姿―退廃した名所―を目の当たりにする者が増加することを意味していたと言えよう。

キーワード　：　近世、旅、石碑、紀行文、風景
Keywords　：　early modern period, travel, stone monument, travel writing, landscape

目次

1. はじめに
1.1. 本稿の課題

*東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門助教

1.2. 風景論
2. 近世の松島
3. 雄島の石碑
3.1. 中世の雄島
3.2. 近世の雄島
3.3. 雄島の句碑
4. 旅行者と雄島
4.1. 句碑建立以前
4.2. 句碑建立以後
4.3. 風景の齟齬
4.4. 学者と俳諧文化
5. おわりに

1.　はじめに

1.1.　本稿の課題

近世は旅の時代である。全国津々浦々への行脚が階層を問わず可能になったことは、中世に比して夥しい数が残存する旅行者の記録（紀行文と道中日記）（注 1）が物語る。

中世までの「信仰」に対し、近世の旅は「遊楽・観光」と特質付けられたが［新城 1982 : 721–745］、その後旅行者の精緻な行動分析をもとに、この見解に囚われることのない、旅の多彩な効果・内実が描出され、近世旅行史研究は深化を遂げてきた。旅に依然として信仰的性質が内在している［岩鼻 1992］、もしくは信仰・物見遊山双方の性質が併存している［高橋陽 2001 : 105–133］、非日常的世界へと旅立つ寺社参詣により身体的・精神的自己解放が達成されるとする［原 2007 : 344］、などは旅行者の内面を捉えた見解である。また、旅が芸能的世界を追体験する意味を持つ（名所がメディア機能を持つ）［難波 1994 : 1–29、鈴木 2012 : 115–154］、習得した知識をもとに知識人層が名所において過去を回想するなど、旅先が歴史考証の場となる［原 2007 : 189–230］、旅そのものが民衆の漂白体験として貴重であり、そこに教育的意義がある［高橋敏 1978 : 67–115］、といった旅の実際的効果に言及した見解もある。

これらは、旅行者を「知識人層」や「庶民層（百姓）」というようなマス的な範疇で把握した上で導き出された指摘であるが、共通しているのはいずれも近世の旅の効果を肯定的に捉えた見解、言い方を変えれば積極的に捉えうる旅の側面を分析した成果だという点である。庶民の長旅は「一生に一度」とも言われた近世であるが、旅が大衆化し、現代に通じる遊楽化・観光化の兆しをみせはじめていたことは間違いなく、他方で巡礼や寺社参詣を終えた精神的達成感を宗教的効果に結びつけることも可能であろう。また、歴史考証や教育といった旅や名所の役割は、旅行者の知的好奇心を刺激し、あるいは人格形成に好影響を及ぼすという意味で、旅の積極的意義を

抽出したものと言える。

だが、旅は人々に対し常に有益な作用を及ぼすのであろうか。現代の如き交通手段や情報に乏しい近世においては、旅先での徒労や予期せぬ落胆はつきものである。治安上の問題や行き倒れにより、旅行者が命の危険にさらされることも珍しくない時代であった。従来なされてこなかった旅の「負の効果」と捉えうる側面の分析から、肯定的な意味のみでは把握しきれない旅の新たな性格を浮き彫りにし、近世の旅の内実をより豊かに描き出すこと、それが本稿の目的である。

では、「負の効果」として、具体的に何を取り上げるのか。注目したいのは近世の旅行者が旅先に対して抱いていたイメージの問題である。

近世の人々は、絵図や名所案内、紀行文や道中日記、歴史書や地誌などの文献を通し、旅先に対して出発前に何らかのイメージ（像）をもつことができた。しかし、それは現実の光景（眺め）と必ずしも合致するとは限らず、両者の懸隔が、現地を来訪した旅行者を失望・落胆させることがあった。例えば、富士山に対し「清浄」「仙境」といった聖地イメージを抱いていた登山者が、道や堂宇の修復代を求める地元住民のゆすりまがいの金銭強要や、飲酒といった世俗化した行為を目の当たりにし、非難した例［青柳 2002 : 158–162］や、幕府巡見使の古川古松軒が、無双の景勝地との評判から期待感をもって象潟を訪れたものの、民家が近接し草が生い茂る現地の光景を前に失望感を抱いた例［長谷川 1996 : 52–54］などがそれに当たる。これらは、観光人類学で取り上げられている、オーセンティシティ（本物）を求めて訪れる旅行者と商業主義に走る現地住民の間で摩擦が生じるという現代的な問題［山下 1999 : 113–136］にも通じるところがある。近世は、現代のような映像や写真を媒介にしたリアルなイメージを持つことができないがゆえに、イメージと現実の光景との齟齬が生じやすく、またその幅も大きかったと考えられる。古代中世には商業出版が発達しておらず、そもそも文献からのイメージの構築が困難であったことをも踏まえると、こうした大きな齟齬は近世の旅をめぐる重要な問題であり、その歴史的性格を議論する上で好個な題材であるといえる。本稿では、特に過去のイメージと実際の光景との相違を、近世の人々が抱く「風景観」の問題として取り上げ、より深く掘り下げていきたい。

1.2. 風景論

「風景」とは何を意味するのであろうか。ヨーロッパでは、採掘などの日常の生産活動への勤勉なまなざしをきっかけに、17 世紀以降に絵画や著作の中に描写される現代的な風景が生まれていったとされる［カンポレージ : 1997］。17 世紀は日本の近世前期に当るが、ヨーロッパと日本では風景の成立過程に大きな相違があるとみなければならない。すなわち、日本には古代以来人々の観念の中で築き上げられてきた歌枕、いわば憧憬的世界観を背景にもつ風景が存在するのである。これが、近世の人々が旅先の名所を評価する上での重要な観念的規範となる。

日本で初めて近代学問として風景を論じたのは、明治 27（1894）年の志賀重昂『日本風景論』である［志賀 1976］。本書は、地理学の立場から日本の特徴的な地形や気候を紹介しており、風景とは何かを定義してはいないが、風景論の端緒を開く画期的成果と位置づけられ、その後様々

な論者によって風景が論じられるようになった。各々の専門分野の視点から立論したもので、風景論に関して学際的な議論が行われてきたとは言い難いが、本稿と関わる風景の定義を取り上げると、例えば生態学者の今西錦司は「風景というのは、美なるものとして、人間によって価値づけられた自然である」と述べ［今西 1975 : 437］、農村風景論者の勝原文夫は、人間と対象との関係において「風土によって触発される審美的印象」と風景を理解しており［勝原 1979 : 4］、人間が審美的価値観よって対象を捉えた結果として風景が生み出されるとの見解を示す。また、文芸評論家の亀井勝一郎は、風景を「人間によって発見され洗錬されつつ、或る額縁を与へられた『自然の一部』」と定義すると共に、「そこに歴史や伝説がからまり、歌枕などになると、一層美しい風景として印象づけられる。」と指摘し［亀井 1971 : 550］、「過去」が風景を規定する重要な要素であることを示唆する。そして、本稿において特に注目したいのが、近年風景の時代的変遷を精力的に論じている景観論者の西田正憲の指摘である。西田は、風景を「人間がある特定の見方をもったまなざしによって捉えられた対象の表象」とし、日本の自然景は古代から中世にかけては信仰の地・神話伝説の地・歌枕の地などで編成されており、風景は「古いものから新しいものまで、層をなしている」と説明する［西田 2011 : 13・324・337］。その上で、瀬戸内海を事例に、歌枕として捉えられた海岸景が近世には紀行文の中で自然景として素直に捉えられ始め、明治時代に西欧の近代的風景観が受容されると伝統的風景（歌枕名所的風景）を完全に離れ、故事来歴に依拠せず、目に見える景観そのものを評価する視覚的風景（近代的風景）が誕生すると述べる［西田 2011 : 47–66、1999 : 3–36・101–182］。この指摘から導き出せるのは、自然、及び人間の営みの産物である歴史・宗教・文化に規定されて生み出され、重層性を持つという風景の特質である。また、人々の景観評価は、観念的な風景観を基準にした評価から、ありのままの自然を基準にした評価へと次第に変遷していくのであり、近世は人々の風景観が刷新されていく過渡期に当るが、未だ伝統的風景観が人々の心を根強く捉えていた時代であると認識できる。

如上の見解を踏まえ、本稿では風景を「人間個々の価値観に基づくまなざしで切り取られ、何らかの性格を与えられた対象」と理解し、特に風景の特質として、宗教的観念や歴史・文化的知識を背景にした回想によって強く意識化される、重層的な構造をもつ、の 2 点を明示しておきたい。その上で、近世の人々がいかなる風景観を抱いて旅をし、旅先での現実の光景にいかなる感懐を抱いたのか、またその理由は何かを解明し、当時の旅の性格について展望することを本稿の具体的課題としたい。分析素材とするのは旅行者、とりわけ知識人層が書き残した紀行文であり、より詳細には、近世より日本三景の 1 つに数えられた松島（現宮城県宮城郡松島町）の名所雄島に対する風景観を検証していくことにする。

2. 近世の松島

近世の松島は仙台藩領（陸奥国宮城郡松島村）に属していた。幕府の儒官林鵞峰は『日本国事跡考』（寛永 20〈1643〉年）の中で、松島を天橋立・厳島と並ぶ「三処奇観」と評している（注 2）。また、近世前期の俳人大淀三千風の「本朝十二景」では田子の浦に次いで松島が挙げられ（注 3）、地理学者古川古松軒は『東遊雑記』（天明 8〈1788〉年）の中で、松島の風景は富士山や田子の浦、清見ヶ関には劣るが天橋立・厳島よりは遥かに優れていると主張している（注 4）。現在の日本三景の枠組みが近世に完全に確立していたわけではないが、各人は一様に松島を景勝地として称賛している（松島の景観論の詳細は、［長谷川 2007 : 23–39］）。実際には、旅行者は自然のみを目当てに松島を訪れていたのではないが、紀行文研究者の板坂耀子に言わせれば、「蝦夷までは行かず、東北各地を巡覧する紀行文で、松島に立ち寄らないものはないといっていい」ほどであり［板坂 1993 : 170］、松島はいわば「旅のメッカ」として定着していた。

【表 1】は、近世に松島を訪れた旅行者の紀行文と、そこから判明する彼らの松島での行動をまとめたものである。松尾芭蕉があまりにも著名であるため、他の人物の訪問が注目されてこなかったきらいがあるが、今回は庶民の記した道中日記を分析の対象としておらず、実際の来訪者は本表に止まらない相当な数に上る。点数の年代別分布は、1600 年代が 5 点、1700～1750 年代が 8 点、1751～1800 年代が 25 点、1801～1850 年代が 19 点、1851 年以降が 4 点となっており、18 世紀後半～19 世紀前半にかけての時期が旅のピークであったことがわかる。業種については、一人が複数の肩書を有する場合（注 5）も当然考えられようが、典拠文献の解題などを標準に、最も一般性を有すると思われる肩書を示した。

表を一見して明らかな通り、松島の来訪先で中心となっているのは、現代と同様、仙台藩主伊達家が再興した瑞巌寺や五大堂である。ただ、ここで注目したいのは雄島である。61 点の紀行文中、42 点で登場する雄島は、瑞巌寺に次いで来訪者の多い場所であるが、現代の松島旅行では雄島は観光ルートに含まれず、来訪者はまばらである。つまり、雄島は近世の松島旅行を特質付ける場所と言ってもよい。なぜ、人々は雄島を訪れたのであろうか。

表１　近世の松島旅行者

番号	和暦	西暦	史料名／典拠	著者・旅行者		松島での来訪場所 （史料の記載順に掲載／雄島以外の島は省略）	古歌	見仏	雄島の石碑 （句碑・墓碑）		雄島の頼賢碑	
				名前	業種				記載	所感	記載	所感
1	寛文２	1662	松島一見記／『江戸文学研究』	西山宗因	俳人	雄島	○	×	×	×	×	×
2	寛文８	1668	海陸世話日記／『随筆百花苑 13』	長屋與四郎	廻船問屋	瑞巌寺、大堂（五大堂カ）	×	×	×	×	×	×
3	貞享３	1686	日本行脚文集／『校訂紀行文集』	大淀三千風	俳人	瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
4	元禄２	1689	おくのほそ道／『芭蕉おくのほそ道』（岩波文庫）	松尾芭蕉	俳人	雄島、瑞巌寺	×	○	×	×	×	×
5	元禄 10	1697	陸奥千鳥／『俳諧紀行全集　全』	桃隣	俳人	五大堂、雄島、西行戻しの松、瑞巌寺、陽徳院、天麟院	×	×	×	×	○	× （碑の紹介のみ）
6	宝永元	1704	道の記／『仙台叢書 4』	伊達吉村	藩主	観瀾亭、五大堂、瑞巌寺、天麟院、雄島	○	○	×	×	×	×
7	正徳２	1712	つほのいしぶみ／『連阿著作集』	連阿	歌人		○	○	×	×	×	×
8	正徳５	1715	金華山紀行／『仙台領の地誌』	朱桃	俳人	海無量寺、雄島、瑞巌寺、陽徳院、円通院、天麟院、五大堂、法性院	×	○	○	「石碑新古のわかちなく物哀れ也」	○	「陰気になりて発句も出ず」
9	享保２	1717	みちのく紀行／国立国会図書館蔵 196-125	釈釣月	歌人	瑞巌寺、陽徳院、天麟院、円通院、西行戻しの松、五大堂、観瀾亭、雄島	○	×	○	「あはれにおほして苔の袖もたゝならすそうち過し」	×	×
10	元文３	1738	松島紀行／国立国会図書館蔵 107-196	千梅亜靖	俳人	五大堂、瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
11	元文３	1738	蝶の遊／『日本紀行文集成４　続々紀行文集』	山崎北華	俳人	五大堂、瑞巌寺、天麟院、雄島	×	○	×	×	×	×
12	元文３	1738	磯まくら／宮城県図書館蔵 KM295-イ1	源則満	歌人	観瀾亭	×	×	×	×	×	×
13	延享３	1746	遊塩松記／宮城県図書館蔵 KM292-ユ1	吉見幸和	神道家	雄島、観瀾亭、瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
14	宝暦５	1755	几掌禅癖／『俳林間歩』	木田几掌	俳人	瑞巌寺、御霊屋（陽徳院カ）、観瀾亭、五大堂、雄島	×	×	○	× （句碑の紹介のみ）	×	×
15	宝暦９	1759	松島旅行日記／宮内庁書陵部蔵 458-1（『片玉集』）	浜岡たみ	歌人	雄島	○	×	×	×	×	×
16	宝暦 10	1760	東奥紀行（出羽三山以降は「探北越七奇記」と題して記す）／『近世紀行日記文学集成 1』	長久保赤水	地理学者	瑞巌寺、円通院、陽徳院、五大堂、雄島、天麟院、山王社	×	×	○	「殺風景」「余の悪む所」	○	「奇なりと謂ふべし」
17	宝暦 12	1762	東海済勝記／『随筆百花苑 13』	三浦迂斎	歌人	雄島、五大堂、瑞巌寺、円通院、天麟院	○	○	×	×	○	「物すごさいはん方なし」
18	宝暦 13	1763	みち奥日記／朝倉治彦「みち奥日記」『四日市大学論集 9-1』	巴凌・二日坊	俳人	五大堂、瑞巌寺、雄島	×	×	×	×	×	×
19	明和５	1768	松しま道の記／徳田進『近世上毛の女性の紀行文―未紹介資料『松しま道の記』を中心として―』	自忍尼	尼		×	×	×	×	×	×
20	明和６	1769	松しま紀行／西尾市岩瀬文庫蔵 92-15	佐々木泉明	俳人	雄島、瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
21	明和７	1770	しをり萩／「松島文集」『わしが国さ　５巻 12 号』	加藤暁台	俳人		×	×	×	×	×	×
22	明和８	1771	をしまのとまや／『平洲全集』	細井平洲	儒学者	五大堂、雄島、瑞巌寺、観瀾亭	○	○	×	×	○	× （碑の紹介のみ）
23	明和８	1771	奥遊日記／『土佐群書集成 14』	池川春水	医師	雄島、瑞巌寺、陽徳院、天麟院、円通院、観瀾亭	×	○	○	× （句碑の紹介のみ）	○	× （碑の紹介のみ）
24	安永元	1772	松しま日記／『近世紀行日記文学集成 1』	嘉恵女	歌人	雄島、瑞巌寺、陽徳院、五大堂	○	×	×	×	×	×

番号	和暦	西暦	史料名／典拠	著者・旅行者		松島での来訪場所 （史料の記載順に掲載／雄島以外の島は省略）	古歌	見仏	雄島の石碑 （句碑・墓碑）		雄島の頼賢碑	
				名前	業種				記載	所感	記載	所感
25	安永元	1772	奥游日録／『日本庶民生活史料集成 3』	中山高陽	画家	瑞巌寺、観瀾亭、雄島、五大堂	×	×	○	「やゝ俗悪也」	×	×
26	安永 6	1777	奥州紀行／『日本庶民生活史料集成 20』	富田伊之	歌人	瑞巌寺、観瀾亭、御霊屋（陽徳院カ）	×	×	×	×	×	×
27	安永 7	1778	奥州紀行／『伊能忠敬書状　千葉県史料近世篇文化史料 1』	伊能忠敬	測量家	瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
28	安永 7	1778	松島紀行／国立国会図書館蔵寄別 6-4-1-1	朴斎道也	（不明）	瑞巌寺、雄島、五大堂	○	×	○	×	○	「見るにかひある物也」
29	天明元	1781	阿古屋之松／『随筆百花苑 14』	津村淙庵	国学者	瑞巌寺、観瀾亭、五大堂、雄島	○	○	○	「座禅窟骨堂などことに物ふりて、たふとさいやまさりぬ」	×	×
30	天明 3	1783	歌戯帳／『随筆百花苑 14』	平秩東作	狂歌師	瑞巌寺、雄島、五大堂	×	○	○	「蓼太が句第一、石よし」	○	× （碑の紹介のみ）
31	天明 6	1786	東遊記／『日本庶民生活史料集成 20』	橘南谿	医師	雄島、瑞巌寺	×	○	○	「此佳景に対すべき作は有ぬとも覚へず」	○	「世の人石摺にして珍重する石碑なり」
32	天明 6	1786	はしわのわかば　続／『菅江真澄全集 12』	菅江真澄	旅行家	瑞巌寺、雄島、天童庵、観瀾亭、海無量寺、五大堂	○	○	○	× （句碑の紹介のみ）	○	「見るものの眼をうちおどろかひたり」
33	天明 8	1788	東遊雑記／『日本庶民生活史料集成 3』	古川古松軒	地理学者	瑞巌寺、円通院、五大堂、雄島、観瀾亭	○	×	×	×	○	× （碑の紹介のみ）
34	寛政 5	1793	北行日録／山崎栄作編『北行日録』	木村謙次	探検家	雄島、瑞巌寺、五大堂、水主町	×	×	×	×	×	×
35	寛政 6	1794	松島日記　完／『松島絵日記―みちのく路程紀行―』	谷文晁	画家	雄島、瑞巌寺、観瀾亭、陽徳院、円通院、天麟院	×	×	○	× （句碑の紹介のみ）	○	× （碑の紹介のみ）
36	寛政 8	1796	松島紀行／東北大学附属図書館本館蔵丙 c-3-16-26	林叟	（不明）	雄島、瑞巌寺、西行戻しの松、五大堂、水主町	×	×	×	×	×	×
37	寛政 9	1797	松島紀行／宮城県立図書館蔵 KM292-マ 7	半井行蔵	儒学者	雄島、五大堂、観瀾亭、瑞巌寺	×	×	○	「甚だ厭う」	○	× （碑の紹介のみ）
38	寛政 11	1799	蝦夷蓋開日記（蝦夷紀行・蝦夷記・蝦夷日記など）／『近世紀行文集成 1』	谷元旦	画家	五大堂、天童庵、瑞巌寺、天順寺、山王社、 西行もどしの松	×	×	×	×	×	×
39	享和元	1801	忠敬先生日記　三・四／『千葉県史料　近世編　伊能忠敬測量日記 1』	伊能忠敬	測量家		×	×	×	×	×	×
40	享和元	1801	蝦夷の島踏・奥のみちくさ松島日記／『近世紀行文集成 1』・『松島志外編 7』	福居芳麿	国学者	雄島、観瀾亭、瑞巌寺、五大堂	○	×	×	×	○	× （碑の紹介のみ）
41	享和元	1801	奥羽紀行／宮内庁書陵部蔵 165-403	藤河漁介	（不明）	瑞巌寺、陽徳院、円通院、天麟院、法性院	○	×	○	「不埒成へし」	×	×
42	享和 2	1802	松島のみちの記／『真葛がはら』	只野真葛	国学者	五大堂、雄島、観瀾亭、瑞巌寺	×	×	○	「いとわづらはし」 「なげかはし」	×	×
43	文化 2	1805	未曽有後記／『近世紀行文集成 1』	遠山景晋	幕臣	水主町、天童庵、観瀾亭、五大堂、陽徳院、瑞巌寺、 雄島、西行戻しの松	○	○	○	「かゝる浅ましきことこそなけれ」	○	「奇也、古也」
44	文化 4	1807	蝦夷紀行（松前紀行、みちのく紀行）／『仙台叢書 6』	堀田正敦	藩主	観瀾亭、瑞巌寺、雄島、五大堂	○	×	×	×	○	「いと昔をしのぶつまとなりぬ」
45	文化 5	1808	伊紀農松原／『解題書目 21　伊紀農松原 1・2』	菊池成章	藩士	瑞巌寺、雄島、五大堂	×	×	○	× （句碑の紹介のみ）	×	×

番号	和暦	西暦	史料名／典拠	著者・旅行者		松島での来訪場所 （史料の記載順に掲載／雄島以外の島は省略）	古歌	見仏	雄島の石碑 （句碑・墓碑）		雄島の頼賢碑	
				名前	業種				記載	所感	記載	所感
46	文化 6	1809	塩松紀行／『仙台叢書 11』	南山古梁	僧	雄島、観瀾亭、五大堂、瑞巌寺、陽徳院、天麟院、円通院、天童庵、海無量寺	×	○	○	× （石碑の紹介のみ）	○	「老硬可観也」
47	文化 13	1816	日本九峰修行日記／『日本庶民生活史料集成 2』	野田成亮	僧	瑞巌寺、御霊屋（陽徳院カ）	×	×	×	×	×	×
48	文政 7	1824	松島日記／斉藤武「松島日記を読む」『置賜文化 108』	矢尾板梅雪	医師	海無量寺	×	×	×	×	×	×
49	文政 9	1826	東遊紀行／国立国会図書館蔵 831-73	原徳斎	儒学者	雄島、観瀾亭、瑞巌寺	○	×	○	× （句碑の紹介のみ）	×	×
50	文政 10	1827	道の記／『近世女人の旅日記集』	田中愛	歌人	瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
51	文政 10	1827	浴陸奥温泉記／『随筆百花苑 3』	小宮山楓軒	儒学者	雄島、石碑、五大堂、瑞巌寺、円通院、天麟院、水主町	○	×	○	「惜哉風景ヲシテ殺シムルコト」	○	× （碑の紹介のみ）
52	文政 10	1827	みちのく日記／『御殿場市史 4 近世史料編』	三井園蚊牛	俳人	瑞巌寺	×	×	×	×	×	×
53	天保元	1830	道のおくのにき／宮内庁書陵部蔵 165-367	平岡道久	（不明）	西行戻しの松、山王社、天麟院、円通院、瑞巌寺、観瀾亭、陽徳院、天童庵、海無量寺、葉山権現、五大堂、雄島	○	○	○	× （句碑の紹介のみ）	○	「見るなる書なり、文ハ甚長しといへとも典雅とするにたらす」
54	天保 7	1836	諸君子句集・陸奥つれゞゝ草／『大原幽学全集』	大原幽学	農政学者	瑞巌寺、雄島、五大堂	×	×	○	× （句碑の紹介のみ）	×	×
55	天保 11	1840	陸奥日記／慶応義塾図書館蔵 240-238-3	小津久足	国学者	五大堂、雄島、天童庵、瑞巌寺	○	○	○	「はなハためにさハりてにくむへし」「風景をうしなひてよからぬことなり」	○	「古色もさすかになつかし」
56	天保 12	1841	北国見聞記／伊勢崎市文化財保護課蔵（影印版）	森村新蔵	名主	雄島、瑞巌寺、陽徳院、円通院、天麟院、法性院、山王社、弁財天、観瀾亭、天童庵、五大堂	×	○	○	× （句碑の紹介のみ）	○	「世の人石摺にして珍重する石碑なり」
57	天保 13	1842	読書余適／『読書余適 睡余漫稿』	安井息軒	儒学者	瑞巌寺、観瀾亭、雄島、五大堂	×	×	○	× （句碑の紹介のみ）	○	「書法遒美。文亦雅淡にして誦むべし」
58	嘉永 4	1851	東北遊日記／『吉田松陰全集 9』	吉田松陰	兵学者		×	×	×	×	×	×
59	嘉永 4	1851	松島行記／国立国会図書館蔵 216-91	楠本覚	儒学者	観瀾亭、瑞巌寺、五大堂、雄島	×	×	×	×	×	×
60	嘉永 6	1853	おくの記行／『山形市史資料 38』	大柏堂清風	俳人	雄島、瑞巌寺、陽徳院、天麟院、円通院、西行戻しの松	×	×	×	×	×	×
61	安政元	1854	諸国廻歴日録／『随筆百花苑 13』	牟田高惇	藩士	瑞巌寺、玉屋（円通院カ）、天麟院、陽徳院	×	×	×	×	×	×

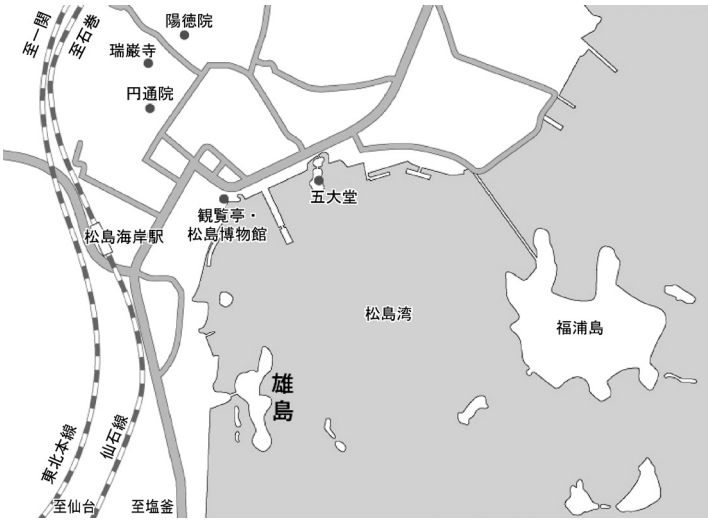
※「古歌」「見仏」の項目は、各紀行文の松島の記載の中にそれぞれに関する言及があれば「○」、なければ「×」で示している。「雄島の石碑」等の項目についても、該当する記載があれば「○」を、なければ「×」を記入している。

3.　雄島の石碑

3.1.　中世の雄島

雄島は松島海岸の南に浮かぶ小島である。瑞巌寺から南に 500 メートルほどであり、陸側から橋で渡ることができる（【地図】【写真 1】）。

松島は歌枕の地として有名であるが、雄島もまた歌枕として広く知られた地であった。源重之「松島や　雄島の磯にあさりせし　あまの袖こそ　かくは濡れしか」（『後拾遺和歌集』）（注 6）を筆頭に、『千載和歌集』（注 7）・『新古今和歌集』（注 8）などに「あまの袖」を詠み込んだ恋歌が収載されている。また、海路時雨を題詠にした藤原俊成「袖ぬらす　をじまが磯のとまりかな　松風さむみ　時雨ふるなり」（『続古今和歌集』）（注 9）や、俊成女の「松島や　をじまの磯による波の　月のこほりに　千鳥鳴くなり」（『新後撰和歌集』）（注 10）のように、悲恋を想起さ



地図　松島

写真 1　雄島（筆者撮影）

せながらも、風や波、月を詠みこむことで荒涼とした寂しい情景を浮かび上がらせる歌も数多く残されている。古代・中世の歌人にとって、雄島は恋歌や旅歌で、嘆きや侘しさを詠む際に登場させる場所だったのであり、これがいわば雄島の 1 つの風景として歌壇に定着していた。

一方、中世において雄島は霊場としても知られていた（以下、中世の雄島については、［入間田 1992 : 167–181、1991 : 1–22、七海 2006 : 49–78、2005 : 29–50］）。特筆すべきは雄島に止住し仏道修練に専心した見仏と頼賢である。長治元（1104）年に伯耆国から雄島に移住した見仏は日夜不断に法華経 6 万部を読誦した。その名声は鳥羽上皇に達し、松 1000 本が下賜され、雄島は千松島と称されるようになった（注 11）。これが松島の名称の由来とも言われる。頼賢は弘安 8（1285）年に雄島に移り住み、同じく島から一歩も出ずに 22 年間経典を読誦した。その功績を称え、徳治 2（1307）年、弟子が中国の僧侶で鎌倉建長寺住持の一山一寧に撰文を願い、石碑を建立した。これが頼賢碑であり、現在は国の重要文化財に指定され、六角の鞘堂に納められている。

また、観応年間（1350〜52 年）に松島を訪れた宗久の紀行文『都のつと』には、「それよりすこしへたたりて小島あり、これなん雄島なるべし、…松竹おひならひて、苔ふかく心すこきところあり、此国の人はかなく成にける遺骨をさむ（納）る所なり」とあり（注 12）、島内に納骨場があったことがわかる。雄島には鎌倉末期を中心に、確認されているだけで 60〜70 基もの板碑が建立され、南北朝期以降は磨崖仏の造立もみられるようになった。高僧の修行以降、雄島は仏の来迎を得て浄土へ旅立つ中間点、彼岸への橋頭保として認識されていったのである。霊場という雄島のもうひとつの風景がここに生み出されたと言えよう。

3.2.　近世の雄島

近世に入っても、霊場的な雄島の風景はしばらく維持されていたようである。仙台藩の藩撰地誌の 1 つ『封内名蹟志』（寛保元〈1741〉年）には、「長橋を過ぐ幽径に入る。苔蘚露凉く崕岩路滑かなり。上に座禅堂有。傍に一亭有不住軒と号す。希膺往昔栖遅の所にて。則見仏の故蹤也。塔婆浮図矗々として植ち。古墳荒塚累々として列る。其北岸に宮千代の遺跡あり。是より細径を過ぐ。骨堂有西南に向ひ擴底泉徹□。死者の遺骨散髪等を収むるの地也。堂後頼賢の古碑有。其地は老杉八九株。海風吹て淅瀝たり。断岸数十仞江波来て奔騰す。其北渚は幽沈寂寞たるの沙汀にして。来客常に稀にして。松杉に寒鴉集るのみ。殆ど凡俗塵囂の地にあらず。島上に登る者は。必ず悽愴悲哀の情を発せざるはなし。」とある（注 13）。見仏の庵居の跡に瑞巌寺 99 世の雲居希膺の寓居があったことや、頼賢碑について触れており、見仏や頼賢が雄島を語る上でのキーパーソンであったことがわかる。さらに、頼賢碑に隣接して死者の遺骨散髪を納める骨堂があること、島の北岸は人気のない寂寥感漂う場所であり、島を訪れる者は「悽愴悲哀の情」に包まれるという。高僧の蹤跡と死者を弔う納骨場を備えた、人々の信仰を集める霊地としての風景が雄島には色濃く残されていたのである。

だが、近世後期になると様相に変化がみられるようになる。松島の案内書『松島案内記』（文

化 8〈1811〉年）には、「御島の奥の院に、古見仏上人法華経を日々読誦なされし声、鎌倉の二位の尼将軍のきこしめし、天竺仏舎利二粒姫子松一千本御ふみそへておくり給ふ。其より松島と云。其御ふみいまに瑞巌寺の宝蔵に有。仏舎利一粒ハ寛永年中大旱故、雲居国師海中に沈め雨を祈給に二日降しとかや。いまに残りの一粒あり。唐僧寧一山の碑の銘あり。高一丈余、横三尺余。芭蕉翁の建碑に句あり。　朝夜さを誰松島にかたこゝろ　其外詩歌諸家之石碑かつゝゞ有。委しくは御覧有べし。」（傍線筆者、以下同）とある（注 14）。見仏の事跡や頼賢碑（「寧一山の碑」）が紹介されている点は『封内名蹟志』と同じであるが、注目すべきは松尾芭蕉の句碑やその他の「詩歌諸家之石碑」が数多く建立されているとの記述である。これは『封内名蹟志』にはみられない内容である。また、案内書という書物の性格によるところもあろうが、『封内名蹟志』が表現した寂寥感のある霊場としての雄島の情景が感受し難くなっている点にも留意すべきであろう。18 世紀半ば以降には数多くの句碑や詩碑が建立され、雄島の雰囲気が一変した。言ってみれば風景の遷移が進行したという見通しを得ることができよう（注 15）。

3.3.　雄島の句碑

では実際に、18 世紀半ば以降の雄島にはどのような石碑が誰によって建立されたのであろうか。【表 2】は 18 世紀～幕末までに雄島に建立された石碑のうち、建立年代が把握できるものを列挙した表である。頼賢碑や骨堂以外の石碑の建立年代は同時代の文献史料からは明らかにし得ず、本表は後年の調査結果を基に作成している。No.1 の薬師堂落成記念碑（松吟庵は頼賢が止住した妙覚庵跡に万治 3〈1660〉年に建てられた庵室）、No.8・10 の慰霊碑を除く全てが句碑・歌碑・詩碑であり、とりわけ句碑の建立が際立っていることが明らかである（注 16）。18 世紀半ばまでに、こうした句碑が雄島に建立されていた形跡は確認できない。

表 2　18 世紀～幕末に雄島に建立された石碑

No.	名称	建立年代		建立者	内容
		和暦	西暦		
1	御島松吟庵薬師堂記念碑	元文元年	1736	天嶺和尚	薬師堂落成の記念碑。
2	芭蕉翁句碑	延享 4 年	1747	山本白英ら 9 人	「朝よさを誰まつしまそ片心」の句銘。
3	雪中庵蓼太句碑	明和 5 年	1768	玉笥山人敬雨、甘泉田口元長	「朝きりや跡より恋の千松しま」の句銘（背面に事績銘）。
4	六花庵官鼠句碑	天明 2 年	1782	天童象外	「松島や葺狩舟の真帆片帆」など二編句銘（背面に事績銘）。
5	芭蕉翁松島吟並序碑	寛政元年	1789	白文（白坂文之）	『おくのほそ道』松島の文銘と「朝夜さを誰まつしまそかた心」の句銘。

No.	名称	建立年代		建立者	内容
		和暦	西暦		
6	流石庵羽積句碑	寛政 3 年	1791		「雪に富むやまつ島々の幾ながめ」の句銘。
7	耳社翁句碑	享和 3 年	1803	女可代、一無（どちらかが茨木重謙カ）	「世の中の富貴ハ暑し山と水」の句銘と耳社翁の事績。
8	名号塚碑	享和 3 年	1803	仙台・志士轍、同・源章壽	曖子禅尼の慰霊碑。
9	曽良句碑	文化 5 年	1808	（遠藤）曰人、（藤森）素檗	「松島や鶴に身をかれほととぎす」の句銘（曾良百回忌記念）。
10	柴田元徳追尉碑	文化 5 年	1808	衣関道碩	江戸の医師柴田元徳（元養）の慰霊碑。
11	文聴句碑	文政元年	1818		「夏痩も愈たり朝の千松しま」の句銘。
12	餐霞亭主墓碑	天保元年	1830	雪空舎南悠、欣多楼爽章、孤坐亭一架、畔戸斎一川	稲次真年の墓碑。南悠ら 4 名の句銘を添える。
13	南山道人詩碑	文政末～天保 5 年ころ		牧舟（禅慧）和尚	仙台瑞鳳寺 14 世南山道人（古梁）の詩銘。
14	蒼虬句碑	天保 11 年	1840	楓□、祖郷	「我たつるけふりはひとの秋のくれ」の句銘。
15	千代女句碑	安政元年カ	1854	青木屋徳兵衛妻しな	「だまされてきて月を見千松島」の句銘。
16	蒼々舎文鱗句碑	安政 5 年	1858		「松島やしくれしくれのいくところ」の句銘。
17	十一家狂歌碑	近世後期		南山道人（古梁）	11 人の歌銘。

※鈴木寅之助『松島金石誌』（瑞巌寺、1962 年）、松島町史編纂委員会編『松島町史（資料編Ⅰ）』（松島町、1989 年）、瑞巌寺博物館編集発行『芭蕉と松島―句碑にみる芭蕉思慕の俳人たち―』（1989 年）などより作成。

句碑で顕彰される人物、及び建立者はどのような者であろうか。

No.2 芭蕉翁句碑の建立者の一人山本白英は、蕉門十哲の一人各務支考の門人渡辺雲裡坊の門人として冬至庵の結成に尽力した。渡辺は芭蕉 50 回忌の寛保 3（1743）年にも仙台榴ヶ岡に芭蕉の句碑を建立しており、仙台における蕉風俳諧の普及に積極的役割を果たしていたとみられる。なお、芭蕉は松島で句を残しておらず、「朝よさを…」は『おくのほそ道』の旅の出立前に残した句である。

No.3 の雪中庵（大島）蓼太は信濃出身の俳人で、蕉門十哲の服部嵐雪の門人桜井吏登の門人である。明和 2（1765）・7（1770）年に奥羽を旅しているほか、各地を行脚し、芭蕉の句碑を建立している。No.4 の六花庵官鼠は江戸の俳人で、雪中庵蓼太の門人六花庵乙児の門人であり、蓼太とも交流があった。No.5 芭蕉翁松島吟並序碑の建立者白文（白坂文之）は塩釜の俳人であり、No.6 の流石庵（川村）羽積は大坂の俳人、No.7 耳社翁（茨木素因）は津藩士で俳諧にも秀

でた。建立者は同藩の郡奉行であった子息の重謙（籬芳）であるとみられる。

No.9 曽良句碑の建立者遠藤曰人（清右衛門）は仙台の俳人で、丈芝坊白居（各務支考の系統を引く加藤暁台の門人）の門人である。芭蕉の門人たちの伝記『蕉門諸生 全伝』を編集し、自身も数千人の門弟をもつなど、仙台の蕉風俳壇の中心人物であった。（藤森）素檗は河合曽良と同じ信濃上諏訪出身の俳人である。No.12 の餐霞亭主（稲次真年）は上総木更津の薬種商で、国学者岡田真澄の門人でもあり、天保元（1830）年に松島で客死している。No.14 の蒼虬は金沢出身の京都の俳人で、芭蕉堂 2 世と号した。加賀蕉門の重鎮和田希因の系統である。No.15 の千代女は各務支考とも交流のあった加賀松任の俳人で、剃髪して尼となり、素園と号した。

以上から明らかな通り、句碑で顕彰された人物には芭蕉及び蕉門俳人が多い。また、建立したのは権力者ではなく、山本白英・遠藤曰人などの蕉門俳人や、被顕彰者の功績を慕う俳諧の素養と経済力を備えた庶民層（地域上層民）であったとみられる。こうした句碑建立の背景には、芭蕉の 50 回忌（1743 年）・100 回忌（1793 年）を起点に機運が高まった蕉風復興運動と、俳諧文化の社会への浸透があると考えられる。関東・東北間など、俳諧を通した地域有力者同士の遠隔地間交流も活発に行われていたこと［杉 2001 : 75–114］、18 世紀半ば以降、在村俳人グループの活動が基になって芭蕉碑の建立が進められたことは既に明らかである［岩橋 2010 : 109–142］。仙台藩領内では、寛保元（1741）年頃に来仙した渡辺雲裡坊が冬至庵を結んで蕉風俳諧の指導に努めたことがきっかけとなって蕉風が広まり、文化・文政年間（1804～1829）に隆盛期を迎えたとされている［仙台市史編さん委員会 2004 : 351–364］。

次に、句碑は雄島のどこに建てられているのか、確認しておきたい。【図】は【表 2】やその他の文献をもとに天保 11（1840）年頃の雄島の句碑建立状況を表したものである。現在も変わってはいないが、見仏・頼賢の庵居のあった島の北部や頼賢碑・骨堂のある南部には句碑が少なく、島の中央部、特に東岸の海上に面した場所に集中して立地していることがわかる。句碑面がいずれも東を向いていること、島の東部に船着場があったこと（【写真 2】）（注 17）などから、船上からも臨むことができるシンボリックな存在として句碑を際立たせようとする建立者の意図が込められていたと理解しておきたい。

18 世紀半ば以降、雄島には芭蕉以下の蕉門俳人の句碑が門人や庶民層（地域上層民）によって次々と建立されていった。その目的は、芭蕉及び蕉門の先人たちの功績を雄島の風景として位置づけ、さらに衆目の集まる場所に建立することによって光彩を放たせ、彼らの名声を高め、それを後世に残すことにあったと言えよう。芭蕉の功績を偲ぶことのできる、新たな風景が雄島に誕生したのである。

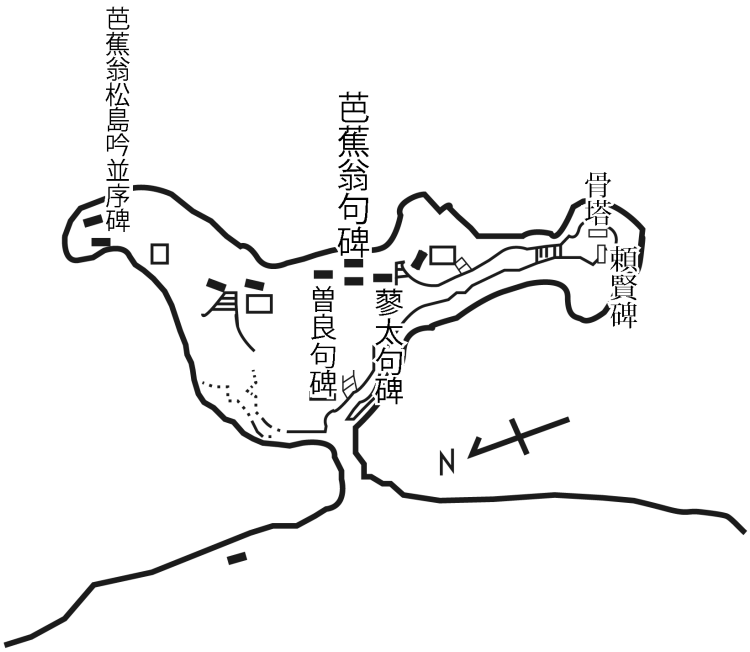


図　雄島句碑所在図（1840 年頃の状況／▬が句碑）

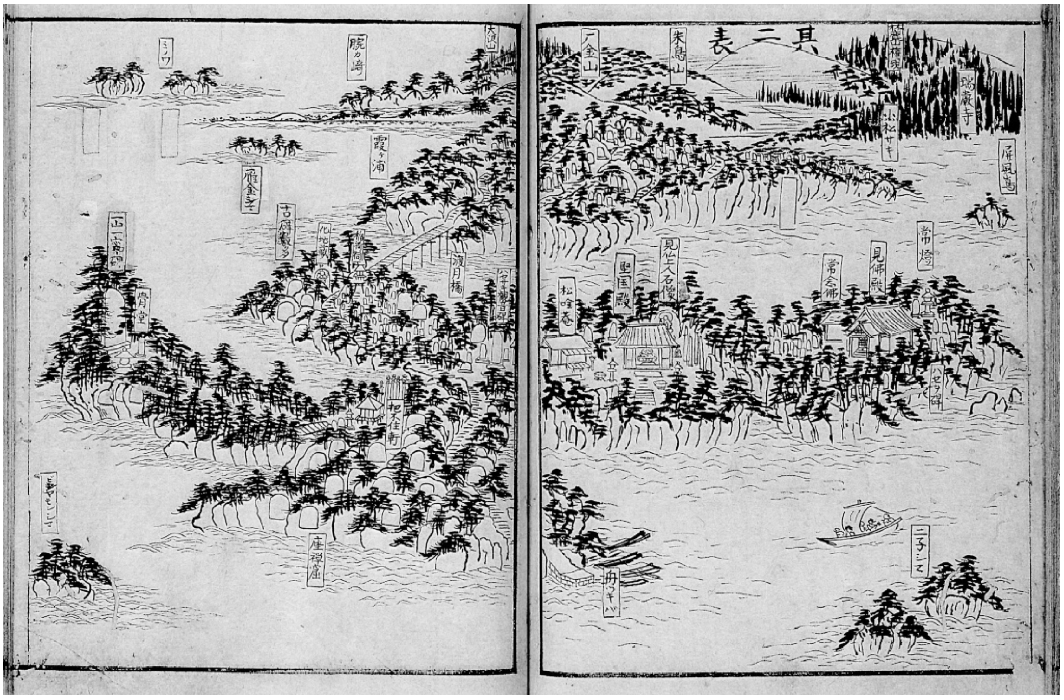


写真２　大場雄淵『奥州名所図会』（19 世紀前半、天理大学附属天理図書館蔵）より雄島の図。島の東部（中央下部）に「舟ツキバ」（船着場）が描かれている。

4. 旅行者と雄島

4.1. 句碑建立以前

上述のような状況の推移（新たな風景の誕生）がみられる中で、旅行者が次から次へと雄島を訪問することになる。彼らは雄島の石碑をどのようなまなざしで見つめたのであろうか。紀行文の記述から検証してみたい。

【表 1】には、旅行者が雄島で石碑（頼賢碑以外）と頼賢碑に対して何らかの所感を抱いたかどうかを、紀行文の記載から明らかにし、表示している。例えば、No.4 の松尾芭蕉『おくのほそ道』の場合、「雄島が磯は地つゞきて海に出たる島也。雲居禅師の別室の跡、座禅石など有。将、松の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穂・松笠など打けふりたる草の庵閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて、昼のながめ又あらたむ…」とあり、芭蕉が草庵で隠棲する道心者を目にするなど、霊場的な風景を実見していたことがわかるが、頼賢碑や他の石碑についての記述はみられない。

一方、No.8 の俳人朱桃の『金華山紀行』では、「朝の間に御島にいたるに、かしこここに石碑新古のわかちなく物哀れ也、いつの頃よりかかる名所も無常所とはなりぬる事よと、かなしく見物(ママ)上人の庵室の跡・一山碑銘・骨堂など見るに、陰気になりて発句も出ず」と、頼賢碑（一山碑）その他の石碑について触れている。「物哀れ」「かなしく」「陰気」などは、石碑に対する遺憾の念の表出とも受け取れるが、基本的には霊場的空間に浸り無常観が湧き上がったことから滲み出た感懐として読み取るべきであろう。No.9 の歌人釈釣月『みちのく紀行』には、「雄島といふ所にあかる道よりことかくしけりたる木陰に茅ふける一宇あり、雲居和尚座禅せられし所とそ、今も古き椅子なと見へ侍り、そこより一町ほと南へさし出て松なと生しけりてあハれに心すミけなる所あり、こゝにも一間四面に瓦ふける一宇あり、はかなくなりし人の白骨なとをおさむる骨堂なりといへり、…あはれにおほして苔の袖もたゝならすそうち過し　松しまやをしまのあまの袖ならて世のはかなさにしほたるゝかな」とある。高僧の禅行の足跡を辿り、骨堂を前にして涙を流し、古歌になぞらえた歌を詠むなど、歌枕・霊場的風景を前にした作家の感傷的な心境が発露されている（頼賢碑に関する記載はない）。

このように、句碑の建立が始まる以前の旅においては、旅行者は石碑に対して違和感を覚えず、霊場的風景を構成する要素として肯定的に受け入れているのである。

4.2. 句碑建立以後

延享 4（1747）年の芭蕉翁句碑建立以降は、松島旅行者の紀行文の件数が最も多くなる、つまりは旅のピークを迎える時期にあたる。【表 1】から明らかな通り、句碑を含めた石碑について言及する記録も増加するようになり、その内容は石碑があることを紹介するのみのもの、実見した石碑の印象を書き残すものに分類できるが、後者の場合、そこにひとつの特色を見出すことができる。すなわち、石碑に対する嫌悪感・忌避感の披瀝である。以下にいくつか具体例を挙げて

みたい。

① No.16 長久保赤水『東奥紀行』（宝暦 10〈1760〉年）

雄島に至り、坐禅堂松吟庵を歴観す、凡そ橋を海に架するは五大堂と此の島となり、相対ひて雌雄の如くにして五大堂は則ち小し、猶雌の如し、独り此島宛も水の中央に在りて形鳥の翼を張れるが如く、実に諸島の雄なり。此れ其名を命ずる所以ならんか。四顧奇絶殆ど筆を擲たんとす、傍に一小碣あり、面に芭蕉の朝夕の句を刻む、好事の徒の為す所なり、其の他石仏碑碣率堵婆の類、累々乎として相列る、小松崎より此に至るまで路傍樹間廻岸巌窟、処として石仏を安ぜざるなく、遠く之を望めば猶白鷺の樹間に群るが如し、余曰く、噫、豈別に地無からんや、洒落たる神仙の境、北邙山に彷彿たり、譬へば花上に□（ころもへんに昆）を曝すが如し、殺風景に非ざるか、我若此の国に当路せば車を下らずして先づ之を一掃せんと、同輩皆余の戯言を笑ふ、少しく退きて斜行すれば骨塔あり、亦余の悪む所、唾して去る、頼賢庵主碑銘あり、元僧寧一山の撰ぶ所なり、草書の碑文奇なりと謂ふべし（原漢文）

石碑に対する嫌悪感を最初にはっきり吐露したのは、地理学者長久保赤水である。長久保は雄島を来訪して芭蕉の句碑を見、それを物好きの輩の仕業であると表現する。さらに、石仏や石碑が群がり立つ光景を目の当たりにして、それを「殺風景」と批判し、自分に権限があればこれを一掃するだろうと述べ、骨堂の前は唾吐して去った。ただし、同じく好奇のまなざしで見つめた頼賢碑に関しては、碑文を「奇なり」と評し、肯定的に捉えている。

② No.31 橘南渓『東遊記』（天明 6〈1786〉年）

此島々の松皆赤色にして、枝皆下に垂れ、作れる松のごとし、故に其景色艶美にして猛からず、扨舟を雄島に付て、上り見るに、雄島頗る大也、此島は見仏禅師の座禅の地也、堂宇今に連れり、島の南の辺に高さ壱丈に余れる碑有り、元の僧寧一山鎌倉建長寺に住持せし時、見仏禅師の為に書する碑にして、字体は草書也、苔封じて文字見えがたき所多し、世の人石摺にして珍重する石碑なり、其外、此雄島には、芭蕉の朝な夕なの吟をはじめ、俳諧者流の発句の碑、或は騒人の詩碑等甚多し、然れども此佳景に対すべき作は有ぬとも覚へず

医師橘南渓は奥羽周回旅行の途上で松島を訪れ、船で雄島に上陸している。見仏の事跡について触れ、頼賢碑に関しては世間の人が重宝する石碑であると述べる一方、芭蕉その他の句碑や詩碑に関しては、島の佳景に相応しい作品はないと、批判を滲ませている。俳句や詩の内容に対する批判のようにもうつるが、頼賢碑を含めた一連の石碑を実見した文脈の中での記述であり、句碑建立を含めた文化的営為への批判も込められていると捉えておきたい。

③ No.49 遠山景晋『未曽有後記』（文化 2〈1805〉年）

是、見仏上人法華読誦の地にて、松島の奥の院と唱ふ。「松島やおしまのあまの袖だにも」を初として吟詠あまた有べし、すべて松島は山も島も皆岩にて、「往古穴居の跡也」とて岩窟夥し、瑞岩寺の法相窟も比類也、直チにいま穴蔵に用るも多し、雄島は殊に多し、…赤水が幽討は宝暦十年なり、其時さへかくありけん、今は石仏は姑舎く、岩窟を其侭墓碑に造りなし、愚民等が戒名を公然と彫付て尺寸の全窟なし、かゝる浅ましきことこそなけれ、赤水が言葉は理り余り有、我はたゞ一掃のみならず、墓碑造り戒名堀たる奴原をば首打切て捨んづ、嗚呼、骨塔有、是亦論に及ばず、馳ぬけて古碑を観る、妙覚庵主頼賢行実の銘、鎌倉建長寺住元僧一山一寧の撰草書の碑文、奇也、古也

幕臣で外交交渉を担当した遠山景晋は、蝦夷地での公務を終えた帰途に松島に立ち寄る。雄島に関する叙述の冒頭は見仏の事跡と古歌である。この「松島やおしまのあまの袖だにも」は、白河天皇の皇子殷富門院大輔が『千載和歌集』に詠んだ歌「見せばやな　雄島のあまの袖だにも　濡れにぞ濡れし　色はかはらず」（注 18）を指しているのであろうか。いずれにしても、遠山にとっての雄島とは何よりもまず中世に高僧が修練した地であり、歌枕の地であった。だが、その眼前に実際に広がっていたのは夥しい数の墓碑で埋め尽くされた雄島の光景であった。彼は、「愚民」による墓碑の建立を浅ましいと批判し、長久保赤水の意見に同調しながら、こうした建立者の首を切り捨てると言い放つ。庶民による墓碑の建立に強烈な嫌悪感を催している点は注目すべきだが、他方で頼賢碑に対しては「奇也、古也」と、碑銘の醸し出す風趣に感じ入っている点も押さえておくべきであろう。

④ No.55 小津久足『陸奥日記』（天保 11〈1840〉年）

このさとハ家数おほからすそのさま塩かまにハこよなくかハり甚寂莫たる地にして俗気なし、よに名たかきところなれハさは俗気あらんとかねておもひしにたかひていと心にかなへるところなり、…このやとりたる家ハ楼つくりにてその楼のまへハやかて海なれハみわたしいはんかたなけれハ、しハし欄干によりてめをよろこハしむれとさてのみにてもありかたけれハ先五大堂にいたりぬ、…船とゝのへさせて御島によせさせそのしまにあかりそこかしこみめくるに、八房の梅といふ名ある木立をりしもさかりにてそこはかとなくにほひつゝ甚よしあるよのさま也　　まつしまやをしまの月をしたひきておもはすたをる梅の一の枝　見仏堂にこしうちかけて見れハ見月堂ともいはまほしくひるハわらふることくに見えし島々も今ハねむるかことくに見えていとしつかなるハさるかたなからかくハかりをしとおもふ…見仏堂松吟庵座禅堂なとをみめくり頼賢碑をみる、こハ寧一山の書にして草書なるか手蹟すくれて見ゆ、まへハさりともしらさりしかけさみれはこの島のうちところせきまて骨堂といふをはしめとして墓碑あるハ俳人の碑なとならひたてり、五大堂のいりくちにもすこしハありしかともかハかりかすおほくは見えさりしかはなハためにさハりてにくむへし、俳人といふも

のハ風流の趣はそのしなにくらへてハおもひの外よく解し得たるものなれともみたりに碑文をたつるハ中々風景をうしなひてよからぬことなり、いはゝ頼賢の碑もこのしまにハやうなきものなれと古ハ古色もさすかになつかしけれハめにもさハらねハ、たゝ古の碑のみをのこして外ハとりすてまほし

小津久足は伊勢松阪の商家の出身であるが、国学を修め、各地を旅して紀行文を残した。『陸奥日記』は松島往復の紀行文であり、旅先での記述が細かく、筆者の率直な感懐が綴られている。雄島についても詳細なレポートを残しており、近世の松島旅行の代表と言ってもよい記録である。

松島に足を踏み入れた小津は、それまで滞在していた塩釜に比べて「俗気」がなく、「心にかなへるところなり」と松島を称賛する。その後、小津は船で雄島に上陸し、「まつしまやをしまの月を」と歌を詠む。「月」もまた雄島の古歌に登場する文言（注 19）であり、それを意識した歌であったとみられる。頼賢碑を眺め碑文の筆跡に魅了された後、改めて目に止まったのは所狭しと立ち並ぶ石碑であった。「はなハためにさハりてにくむへし」（甚だ目に障りて憎むべし）というのが、その風景に対する率直な感想であった。俳人は風流に関しては身分・身の程の割に心得ているが、みだりに石碑を建てるのは風景を損なうことである、と意見は俳人の所業への批判に及んだ。だが、この小津もまた頼賢碑に対しては肯定的な立場を取る。すなわち、「古色もさすかになつかし」く、頼賢碑のみを残して他の石碑は捨ててしまえばよい、と主張するのである。

このほか、水戸藩の儒学者小宮山楓軒（No.51）もまた「古歌アル名所」として雄島を訪れたものの、石碑が林立する光景に「殆ンド嘔吐」せんとしたという。多少の誇張が含まれていたとしても、石碑に対して強い嫌悪感を抱いていたことは疑いないであろう。

4.3.　風景の齟齬

以上、いくつかの例から明らかな通り、句碑の建立が進んだ 18 世紀半ば以降、雄島を訪れた旅行者の中には石碑の乱立する島の光景に嫌悪感・忌避感を抱く者がいた。その理由について、旅行者が抱いている風景観に着目しつつ考察してみたい。

【表 1】には「古歌」「見仏」の項目を設けている。ここでは、紀行文中の松島の記事において、雄島の古歌について言及される、もしくはそれを枕にした歌が詠まれる場合、または見仏に関する言及がみられる場合に「〇」を付している。結果は、古歌への言及がみられたのが 20 件、見仏への言及がみられたのが 17 件である。具体的な記述は、「古歌」に関しては「「松島やおしまのあまの袖だにも」を初として吟詠あまた有べし」（遠山景晋）、「雄島コレモ古歌アル名所ナリ」（小宮山楓軒）といった表現であり、「見仏」では「こゝはむかしけむぶつ（見仏）といひしひじり（聖）のすん（住）たるところとなむ」（細井平洲）、「此島は見仏禅師の座禅の地也」（橘南渓）といった言い回しである。頼賢碑への言及も加味すると、こうした例から明らかなのは、旅行者

が雄島が歌枕の地であり、見仏や頼賢といった高僧が止住して修行した地であることを予め認知していたということである。人々が、雄島に対していわば歌枕や霊場といった風景観を抱きつつ旅立っていたと言い換えることもできよう。【表 1】に関して、少なくとも紀行文中に古歌や見仏の事跡を紹介している旅行者は、古歌に詠まれた風景を追体験し、思いを馳せることのできる場所、または高僧が修行を重ねた俗世と隔絶した場所として雄島をイメージしており、そこで旅行者が求めたのは歌枕を彷彿とさせる風景、または霊場的風景であった。だが、現実に旅行者の眼前に広がっていたのは、句碑をはじめとする夥しい数の石碑である（【写真 3】）。自らが抱いていた風景観と著しく懸隔する光景を目の当たりにしたとき、旅行者の心中に去来したのが「此佳景に対すべき作は有ぬとも覚へず」（橘南渓）・「惜哉風景ヲシテ殺シムルコト」（小宮山楓軒）・「風景をうしなひてよからぬことなり」（小津久足）といった、風景の変容に対する失望感や憤りだったのではないだろうか。

写真３　雄島の石碑（筆者撮影）

一方、中世に建立された頼賢碑は高僧止住の足跡を示し、当時に思いを馳せることのできる象徴的造形であり、いわば霊場的風景を構成する要素の 1 つであった。同じ石碑であっても、「世の人石摺にして珍重する石碑なり」（橘南渓）・「奇也、古也」（遠山景晋）・「古色もさすかになつかし」（小津久足）というように、印象を綴ったほとんどの旅行者から敬意をもって好意的に受け止められているのは、それが雄島の風景の構成要素として容認されたからに他ならないであろう。

さらに付け加えれば、紀行文中には雄島を含めた松島の自然（海・島・松が織りなす景観）を称賛する記述が多くみられるが、これもまた眼前の光景をそのまま受容した結果ではなく、過去の風景（歌枕）との対比により「美観」として評価された結果であると理解できるのではないだ

ろうか。こうした点について、例えば『おくのほそ道』が歌枕を訪ねる旅であったことは、「耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若し生きて帰らばと、定めなき頼みの末をかけ」などの文面から明らかである。論者の中には、松尾芭蕉は旅先で写実的な意味での風景を見ていないとする主張がみられるが［内田 1992 : 32、柄谷 1980 : 19］、つまりは彼特有の詩的素養と情感を背景に、他者と異なる風景を見ていたということであろう。近世の人々は、歌枕に限らず、宗教・歴史・文芸的な回想・追憶に基づいて、自然を審美的に価値づけ風景化していたと考えられる。脳裏に刻印されている風景観によって、実際の場は美しくも醜くもなるのである。近世に入り、名所が知識としての「ナドコロ」から見るべき対象としての「メイショ」に変わったとする議論があるが［水江 1985 : 3–33］、これは多くの来訪者の風景観と実際の光景との齟齬が露わになった結果、生じた変化であると理解できる。

4.4.　学者と俳諧文化

近世の旅行者が抱く過去のイメージと現実の光景との相違の背景を風景論的観点から説明したとき、疑問として残るのは、旅行者はなぜ同じ過去でも古代・中世の歌枕や霊場的風景に回帰したのか、つまりはなぜ句碑をみて芭蕉の功績に思いを馳せることができなかったのか、同じ過去でも芭蕉が雄島を来訪した時代に回帰することがなかったのかという点である。これは、旅行者がなぜ芭蕉の功績を受け入れられなかったのか、という問題に置き換えることもできる。この点については、石碑に対して強烈な批判的まなざしを向けているのが、主に特有の文化的価値観を有していた学者層であったことに着目しなければならない。

雄島を訪れた旅行者は、石碑の建立者に対し、「好事の徒」「愚民」「俳人といふものハ風流の趣はそのしなにくらへてハおもひの外よく解し得たるものなれとも」といった見下げた表現を書き記している。こうした侮蔑意識（自己の優越意識）の披歴は、石碑建立が、主に同時代の蕉門俳人や庶民層（地域上層民）によってなされていることなど、通俗的な俳諧文化の所産であると認識されていることに起因していると考えられる。墓碑は、本来的には霊場空間を構成する要素として把握されるべきであるが、当時庶民層に浸透し大衆化を遂げつつあった文化の象徴的造形が同じ空間に出現したとき、同様に庶民層が建立した墓碑もまた通俗的な習俗の産物として認識され、忌避の対象となっていったのではないだろうか。

【表 1】から明らかなように、句碑の建立後に石碑に対して特に露骨な嫌悪感を示しているのは、長久保赤水・橘南渓・半井行蔵・只野真葛・遠山景普・小宮山楓軒・小津久足であるが、彼らはいずれも儒学・国学・医学などを修めた学者である（注 20）。旅先で露呈された「愚民」観や自己の優越意識、場の善悪を「俗気」の有無で判断しようとする価値観は、自己を高く持する矜持と俗世間を白眼視する反俗性という典型的な文人的性格［中村 1982 : 375–407］そのものであったと理解できる（注 21）。近世の文芸世界においては、18 世紀には雅（伝統文化）と俗（新興文化）の融和が進み、俳諧もまた芭蕉の登場により本来の俗から雅の範疇への向上を果たそうとしていたが、結局は和歌や詩文の雅文芸を上位とみなし、俳諧を下位の俗文芸とみなす価値意

識が根底から動揺することはなかったのである［中野 1999 : 1–65］（注 22）。狂歌師であり、儒学・漢学にも秀でた平秩東作は、『歌戯帳』（No.30）の旅において仙台国分寺の芭蕉と蕉門俳人の句碑を見た際、「近年はせを（芭蕉）の石塔はやりものにて、六十六ヶ国におほかたなき所なし、おほくハおのれはいかい（俳諧）師なりといふ事を人にひけらかさんとて、富家なおとこなどが名聞にてたつるなり、もとははせををろくに知つたものでハなし、予も芭蕉はひいきなれども、今でハおきなゝゝゝと通りて、あまりひいきが多きゆへ、うつとう（鬱陶）しいきミ（気味）なり」（カッコ内筆者）と、ろくに芭蕉を理解しない富者が名誉欲にかられて句碑を建立していると非難し、近年の通俗的な芭蕉ブームに辟易している。平秩は雄島を訪れた折には、句碑を「蓼太が句第一、石よし」と評し、六花庵官鼠について「きやつ方々へ石碑を建てし由なり」と付言する。句を評価する一方で、碑文が刻まれた石を褒め、六花庵官鼠を「きやつ」と呼びかける表現からは、句碑建立に対するそこはかとない忌避感と皮肉を読み取ることができるように思われる。このほか、蕉風俳諧を一刀両断する国学者の俳諧論も一般に見出すことができる［中野 1992 : 101–104］（注 23）。

以上のように、近世人の文化的価値観の問題は文化史的にも重要な論点であろうが、旅行史研究においても参照すべき重要な見解である。すなわち、風景論的な立場から旅の性格を論じるにあたり、なぜ近世的な名所が学者層によって忌避されたのかを解き明かす手がかりが、そこから得られるのである。巷間に広く浸透し、通俗化しつつあった蕉風俳諧に対して学者たちが嫌悪感を抱くことは、和歌や詩文が古典として当代文芸の首位に位置づけられる近世においては決して奇異なことではなかった。自らが修めた学問への優越意識と俗文芸・俗文化に対する侮蔑意識が、学者たちに近世の石碑に対する批判的まなざしや忌避感を生育させたと言える。同じ過去ではあっても、松島旅行者が芭蕉に思いを馳せることがなく、特に歌枕や霊場的風景に強い憧憬を抱いていたのは、こうした理由によるものと考えられる。

5. おわりに

本稿は、近世の紀行文を分析素材とし、人々が旅先に対して抱くイメージと現実の光景との間に生じる齟齬を風景観の問題として捉え、その事情を検討してきた。風景は、いわば何らかの基準に基づいて人間のまなざしが景観に与えた評価である。それは重層的な構造をもち、雄島の場合には、歌枕の地・霊場・芭蕉来訪の地（句碑建立の地）という中世から近世にかけての風景の変遷があった。旅行者の中には歌枕を彷彿とさせる風景、あるいは霊場的風景との邂逅を期待して雄島を訪れる者がいたのであり、石碑の林立する現実の光景を目の当たりにし、嫌悪感や忌避感を露呈したのである。

以上のような、旅がもたらす「負の効果」を風景論的観点から分析した結果明らかになったのは、近世の旅行者が、旅先において思いを馳せる過去を取捨選択しているということである。当時の人々が過去に囚われて旅をしていること自体は、鎌倉での参詣行動をもとに知識人層の「懐

古主義」的意識がすでに抽出されており［原 2007 : 189–230］、松島旅行者の内面はそれに通底する面があると言うこともできる。ただ、本事例において、雄島を訪れた旅行者はあらゆる過去に思いを馳せているのではない。特に学者層は、自らの文化的価値観に基づき、近世に建立された石碑に対して強い批判的まなざしを向け、一方で古代・中世の歌枕・霊場的風景に対する憧憬を露わにしたのである。そこには眼前の近世の史跡から積極的に何かを学び取り、思想・教養の幅を広げようとする姿勢を看取することはできない。

こうした傾向は、恐らくは雄島のみでみられることではないだろう。芭蕉『おくのほそ道』の行程を考えただけでも、少なくとも平泉や象潟でも同様の傾向が検出できると推測される。近世の旅は、自らが思い描く名所が消滅しつつあることを旅行者が認識させられる行程であったと性格付けられるのではあるまいか。先述した通り、松島旅行者の紀行文は 18 世紀後半から 19 世紀前半が点数のピークであるが、皮肉にも旅が隆盛することは、名所の現実の姿―退廃した名所―を目の当たりにする者が増加することを意味してたと言えよう。こうした情勢は、名所の側、すなわち旅先の住民にとってはまさに死活問題であり、名所の再整備が促される事態が発生することにも繋がってくるのであろう。

本稿は庶民が書き残した道中日記ではなく、知識人が書き残した紀行文を分析素材としてきたが、図らずも主に学者層が自身の文化的価値観を背景に近世の石碑に強い批判的まなざしを向けていることが明らかになった。「学者」という粗く、やや曖昧な分類にとどまっているが、このことからは、身分や職業によって風景観や石碑へのまなざしが異なってくるという見通しをもつことができ、ひいては今後の研究への課題を提起することができる。これまでの近世旅行史研究は、旅行者の行動を検証する際、旅行者を「庶民層」「知識人層」といった範疇でマス的に把握してきた。今後は、知識人層の中でも武士・学者・歌人・医師・僧侶といった身分や職業ごとに、さらには修めた学問の種類ごとに、名所に向けられる視線を検証していく作業が必要になってくる（例えば、復古思想の強い国学者であれば古代中世への回帰がより顕著にみられることも予想されよう）。あくまで個人史に陥らない範囲で旅行者の「個性」に着目し、それによる旅の行動や思考の規定性を検証することにより、近世の旅の多彩な側面がより深く描出されることが期待されよう。

（本稿は JSPS 科研費 23720313、26770213 の成果である）

注

(1) 新村出編『広辞苑』（第 6 版、岩波書店、2008 年）によると、紀行（文）は「旅行中の出来事・見聞・感想などを記したもの。文学作品の一分野ともされる。…旅日記。旅行記。道中記。」とあり、道中（日）記は紀行文の中に含まれるとされる。実際、近世紀行文には文学作品的要素が少なく、道中日記との区別が難しいものもみられるが、研究においては紀行文と道中日記は分類され、分析されてきた。本稿では、時に和歌や俳句を盛り込みながら、旅先の状況や故事、旅行者自身の感懐を詳しく記した自己表現の旅の記録を紀行文とし、「…道中（日）記」「…旅日記」といった表題を持ち、来訪先やその状況、かかった費用を箇条書きなどで簡潔に綴った客観性の強い記録を道中日記として把握する。

（2）林鵞峰『日本国事跡考』（1643 年、東北大学附属図書館狩野文庫蔵 4713-1）。
（3）大淀三千風『日本行脚文集』（1689 年、大橋乙羽校訂『校訂紀行文集』博文館、1900 年）。
（4）古川古松軒『東遊雑記』（1788 年、竹内利美ら編『日本庶民生活史料集成 3』三一書房、1969 年）。
（5）例えば、藩士であり儒学者でもある、僧であり俳人でもある、といった場合がある。
（6）藤原通俊撰『後拾遺和歌集』（1086 年、久保田淳・平田喜信校注『新日本古典文学大系 8　後拾遺和歌集』岩波書店、1994 年）巻 14 恋 4。
（7）藤原俊成撰『千載和歌集』（1188 年、片野達郎・松野陽一校注『新日本古典文学大系 10　千載和歌集』岩波書店、1993 年）巻 14 恋歌 4、殷富門院大輔「見せばやな　雄島のあまの袖だにも　濡れにぞ濡れし　色はかはらず」。
（8）源通具ら撰『新古今和歌集』（1205 年、田中裕・赤瀬信吾校注『新日本古典文学大系 11　新古今和歌集』岩波書店、1992 年）巻 10 羈旅歌、式子内親王「松が根の　雄島が磯の小夜枕　いたくな濡れそ　あまの袖かは」。
（9）藤原為家ら撰『続古今和歌集』（1265 年、国民図書株式会社編『校註国歌大系 5　十三代集 1』国民図書株式会社、1928 年）巻 10 羈旅歌。
（10）二条為世撰『新後撰和歌集』（1303 年、国民図書株式会社編『校註国歌大系 6　十三代集 2』国民図書株式会社、1928 年）巻 6 冬歌。
（11）鎌倉時代の初期にはもう 1 人「見仏」を名乗る僧が修行し、名声を耳にした北条政子から仏舎利二粒を収めた水晶五輪塔が送られたとされている。後年の記録では、しばしば 2 人の「見仏」の事績が混同されている。
（12）宗久『都のつと』（1350～1352 年、福田秀一ら校註『新日本古典文学大系 51　中世日記紀行集』岩波書店、1990 年）。
（13）佐藤信要編『封内名蹟志』（1741 年、鈴木省三編『仙台叢書 8』仙台叢書刊行会、1925 年）。
（14）寺田能円『松島案内記』（1811 年、松島町史編纂委員会編『松島町史資料編Ⅰ』松島町、1989 年）。
（15）ただ、句碑の建立が進んでからも骨堂への納骨や墓碑の建立が全くなくなったわけではないとみられる。本稿は「旅行者にとっての雄島」という見方にほぼ限定しているが、地域住民の動向を踏まえた雄島の性格の微細な変化を明らかにしていくことは、近代以降も念頭に置いた名所雄島の歴史的変遷を辿る上で、今後不可欠な作業であると考えられる。
（16）このほか明治期の建立、及び建立年代未詳で表に挙げていない石碑が 9 基あるが、そのうち 6 基が句碑、2 基が歌碑、1 基が詩碑である。
（17）近世の紀行文には塩釜から乗船し、直接雄島に着船したとする記述が散見される。
（18）前掲注（7）。
（19）前掲注（10）など。
（20）遠山景晋は幕臣であるが、昌平坂学問所の学問吟味に筆頭で及第している。
（21）なお、雄島を訪れながら頼賢碑その他の石碑に関して全く触れていない紀行文は、他の場所に関する記載も簡素であり、そもそも全体の記載量を少なくし、ある程度簡潔にまとめる意図をもって書かれているものと思量される。
（22）なお、小津久足に関して今少し付言すれば、『陸奥日記』の末尾では「私のみおほきその古学の道はふつにおもひをたちて、その後は、としひさしく、たゞ歌よむことゝ、風流をのみむねとたのしめり」と述べられており、［菱岡憲司 2004 : 23-34］によると、小津はこの旅の時点では国学と決別していたという。ただ、その前年に著した紀行文『浜木綿日記』の中にみられる「風流なき人、ものしらぬ人、地理をわきまへぬ人ハ、名所古蹟をしることあたハす、文字にうとき人ハ、めにみることをしるすことあたハす」（無窮会専門図書館神習文庫蔵 7072）という表現からは、国学をはじめとする諸学の研鑽を積み、知識・教養を具備したことによって立つ自負を汲み取ることができるのではないだろうか。
（23）国学者上田秋成の松尾芭蕉嫌いも夙に指摘されるところである。

引用文献

青柳周一
2002『富嶽旅百景―観光地域史の試み―』158–162、東京：角川書店。
板坂耀子
1993『江戸を歩く―近世紀行文の世界』170、福岡：葦書房。

今西錦司
1975『今西錦司全集 9』437、東京：講談社。
入間田宣夫
1992「東の聖地・松島　松島寺と雄島の風景」網野善彦・石井進・福田豊彦監修『よみがえる中世 7　みちのくの都　多賀城・松島』167–181、東京：平凡社。
1991「古代・中世の松島寺」松島町史編纂委員会編『松島町史通史編Ⅱ』1–22、宮城：松島町。
岩橋清美
2010「歴史環境の生成」岩橋清美『近世日本の歴史意識と情報空間』109–142、東京：名著出版。
岩鼻通明
1992「道中記―旅のなかの信仰」岩鼻通明『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』155–262、東京：名著出版。
内田芳明
1992『風景とは何か　構想力としての都市』32、東京：朝日新聞社。
亀井勝一郎
1971『亀井勝一郎全集 13』550、東京：講談社。
勝原文夫
1979『農の美学』4、東京：論創社。
柄谷行人
1980『日本近代文学の起源』19、東京：講談社。
カンポレージ・ピエーロ（中山悦子訳）
1997『風景の誕生―イタリアの美しき里』東京：筑摩書房。
志賀重昂
1976『日本風景論上下』東京：講談社。
新城常三
1982『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』721–745、東京：塙書房。
杉仁
2001「在村における技術・商品・風雅の交流」杉仁『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流―』75–114、東京：吉川弘文館。
鈴木理恵
2012「旅の学び―メディアとしての名所―」鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』115–154、東京：塙書房。
仙台市史編さん委員会
2004『仙台市史通史編 5 近世 3』351–364、宮城：仙台市。
高橋敏
1978「民衆の旅―巡礼供養塔からみた旅の教育・文化史的意義―」高橋敏『日本民衆教育史研究』67–115、東京：未來社。
高橋陽一
2001「多様化する近世の旅―道中記にみる東北人の上方旅行―」『歴史 97』105–133。
中野三敏
1999「十八世紀の江戸文化」中野三敏『十八世紀の江戸文芸』1–65、東京：岩波書店。
1992『江戸文化評判記』101–104、東京：中央公論社。
中村幸彦
1982「近世文人意識の成立」中村幸彦『中村幸彦著述集 11』375–407、東京：中央公論社。
七海雅人
2006「霊場・松島の様相―基礎的事項の確認―」東北中世考古学会編『東北中世考古学叢書 5　中世の聖地・霊場』49–78、東京：高志書院。
2005「鎌倉・南北朝時代の松島―基礎的事項の確認―」入間田宣夫編『東北中世史の研究下』29–50、東京：高志書院。
難波信雄
1994「道中記にみる近世奥州民衆の芸能知識と伝承」『東北学院大学東北文化研究所紀要 26』1–29。
西田正憲

2011『自然の風景論　自然をめぐるまなざしと表象』13・47–66・324・337、東京：清水弘文堂書房。
1999『瀬戸内海の発見　意味の風景から視覚の風景へ』3–36・101–182、東京：中央公論新社。
長谷川成一
2007「日本三景の成立と名所観の展開」島尾新・長谷川成一編『日本三景への誘い　松島・天橋立・厳島』23–39、大阪：清文堂出版。
1996『失われた景観　名所が語る江戸時代』52–54、東京：吉川弘文館。
原淳一郎
2007「鎌倉の再発見と歴史認識・懐古主義」原淳一郎『近世寺社参詣の研究』189–230、京都：思文閣出版。
菱岡憲司
2004「小津久足「陸奥日記」について」『語文研究 98』23–34。
水江漣子
1985「近世初期の江戸名所」西山松之助先生古稀記念会編『江戸の民衆と社会』3–33、東京：吉川弘文館。
山下晋司
1999「楽園の創出　観光文化論」山下晋司『バリ　観光人類学のレッスン』113–136、東京：東京大学出版会。